

海人とか見らむ旅行く我れを

——人麻呂羈旅歌の表現——

三田 誠 司

一、「海人」と「我れ」

『萬葉集』卷第三、雑歌の部に収められた「柿本朝臣人麻呂が羈旅の歌八首」の中に、次の一首がある。

荒栲あらたへの藤江の浦うすきに鱸釣あまる海人とか見らむ旅行く我れを

(3・252)

一本には「白栲の藤江の浦に漁りする」といふ。

この歌を含む「羈旅の歌八首」は、瀬戸内海東部、特に明石海峡付近の詠というまとまりが看取される。この歌に見える「藤江の浦」も現在の神戸市付近をさす地名である。おそらく西下時の詠であろう。右の歌は、「旅行く我れ」なのに、この浦で鱸を釣る「海人」と見間違えられるのではないだろうかという懸念を表現している。

この点について、古くは、山田孝雄氏『萬葉集講義』が「その釣り船のさまの面白さに、われを忘れてありけるをふと我に

かへりてみれば我は旅人なりけりといふことをかくいへるが面白きなり」と評するように、旅人である自分が「海人」の集団の中に取り紛れていることに興味を感じての作と捉えられた。こうした捉え方に対して、吉永登氏「柿本人麿の旅の歌八首について」(『万葉—通説を疑う』一九六九年。初出は『国語と国文学』四四卷一二号、一九六八年)は、

一度赴任すれば、おそらく数年間は帰国することのできない彼らの、その心の唯一の支えになったものは、下級の役人とはいえ、とにかく支配階級に属しているのだという誇りであっただろう。しかるに今や十数日、衣服もよごれあかづいていくのである。いくら力んでみても誇りは形の上からくずれていくのである。そうした旅人である作者が、漁師と見間違えられそうであるという時、それがどのような意味を持つのかはおよそ見当がつくのではないだろうか。もとより単純な怒りとみることが狭いかもしれない。あるいは自嘲と見ることも許されよう。

と述べ、以来、旅に疲れた「我れ」の姿が漁夫と見まがうばかりになつてゐることを通して、旅のつらさをうたつたものと捉えるのが一般的となつた。さらに、公人としての旅行であるのに、それが知られないことに對する自嘲を読み取る説も多い。武田祐吉氏『増訂萬葉集全註釈』は、「旅行をすることについては、公人としての自負があり、しかも他人がそれを知らないで漁夫と見ているであろうという所には、寂寥感が潜んでいる」と指摘し、清水克彦氏『柿本人麻呂研究』（一九六五年）も、

旅の途上にあるために、海人と見まがうようなみすばらしい姿をしていようとも、自分は天皇の命を受けて遠の朝廷に使用する官人なのだという、人麻呂の自負の心が見られる。

と述べ、一首の背後に官人としての自負を読み取っている。

しかしながら、「海人」と見られることを歌い手がいかなることと受けとめているかについては、今少し考察の余地があるのではないか。ここにうたわれる「海人」を、洗練された都人とは対極に位置する貧しくみすばらしい存在として捉えてよいのだろうか。

「旅行く我れ」は都人であり、おそらくは公務によつて地方に下る官人でもあろう。また、都からの旅人と「海人」との間に身分の隔たりがあることも事実であらう。だが、この歌の表現において対比的に扱われているのは「鱸釣る海人」と「旅行く我れ」とである点を重視すると、両者の間に意識されている相違は、貴賤の差である前に、日常的な生活を営む「海人」と

非日常的な「旅」にある「我れ」との差であるといえるのではないだろうか。そこで、以下、『萬葉集』の中に現れる「海人」の姿を概観し、「海人とか見らむ」という表現の意味するところについて検討したい。

二、『萬葉集』の「海人」

『萬葉集』における「海人」全般の扱われ方を論じた高木市之助氏「萬葉のあま」（『雑草萬葉』一九六八年。初出は『萬葉』二三号、一九五七年）は、萬葉歌の中に、自然の中の点景として描かれる「あま」の姿をうたうものと、都人とは身分の違ふみすばらしい存在として「あま」をうたうものとの二系列があると指摘する。

雑歌における「海人」は基本的に讚美すべき景物の一つとして詠み込まれる。

朝なごに楫の音聞こゆ御食つ国野島の海人の舟にしあるらし
(6・九三四、山部赤人)

あり通ふ難波の宮は海近み海人娘子らが乗れる舟見ゆ

磯に立ち沖辺を見れば藻刈り舟海人漕ぎ出らし鴨翔る見ゆ
(7・二二七)

右のような「海人」の居る風景を詠む歌は枚挙に暇がない。中でも難波の海や、伊勢の海の「海人」は、宮廷に海産物を奉

献する者として多くうたわれている。海上に浮かぶ多くの船が讚美されることの他に、

潮干の御津の海女のくぐつ持ち玉藻刈るらむいぎ行きて見

む (3・二一九三、角麻呂)

玉藻刈る海人娘子ども見に行かむ舟楫もがも波高くとも

(6・九三六、笠金村)

我が背子を安我松原よ見わたせば海人娘子ども玉藻刈る見ゆ (17・三八九〇、三野石守)

のように、浜辺で玉藻を刈る「海人娘子」の景が詠まれることも多い。右のうち、前の二首は、特に「海人娘子」をわざわざ見に行こうとしている。「見る」に値するものとうたうことは、讚美のひとつの型である。だから、これらの歌には「海人」を見下す視線はない。すでに高木論が述べていることだが、「海人」を見下していないのは、それがまったくの景物として捉えられているからで、人間としての尊敬や軽侮とは無縁だからである。

一方、「海人」を身分の低いもの、哀れな存在として描いた例としては、次のような歌がある。

打ち麻を麻続の王海人なれや伊良虞の島の玉藻刈ります

(1・二二三、時の人)

あさりする海人の子どもと人は言へど見るに知らえぬ貴人の子と (5・八五三)

第一例は、王の身分にある人がまるで「海人」のように玉藻を刈っている姿を哀れと見ている歌で、第二例は、松浦川で魚を釣る神仙の女性と出会った作者がその正体を歌であらわしたものである。王であること、神仙であることを強く示すための對比として身分の低い「海人」が持ち出されている例といえよう。だが、右はやや特殊な例であって、「海人」の身分が低いことは自明であるためか、ことさらに表現されることは少ない。

歌において多数を占めるのは前者のような景物として捉えられた「海人」であり、うたわれた表現において特徴的なのは、労働の様子とともに描かれることが非常に多いという点である。

大宮の内まで聞こゆ網引すと網子ととのふる海人の呼び声

(3・二三八、長意吉麻呂)

：荒榜の藤井の浦に 鮪釣ると 海人舟騒ぎ 塩焼くと

人ぞさはにある (6・九三八、山部赤人)

あさりする海人娘子らが袖通り濡れにし衣干せど乾かず (7・一一八六)

この傾向は、先に景物の中に見える存在としての「海人」「海人娘子」の例として掲げた歌にも見える。さらに、この労働は昼夜を問わない。

紀の国の雑質の浦に出で見れば海人の燈火波の間ゆ見ゆ

山の端に月傾けば漁りする海人の燈火沖になづさふ
(7・一一九四)

ひさかたの月は照りたり暇なく海人の漁りは燈し合へり見ゆ
(15・三二六三、遺新羅使人)
(15・三二六七、遺新羅使人)

その労働内容は男性が海上の釣り、女性が浜辺の海藻類の採集ということが多いが、女性が海上に出ている場合もあり、中にはかなりの危険もあったようにうたわれている。

海人娘子棚なし小舟漕ぎ出らし旅の宿りに楫の音聞こゆ
(6・九三〇、笠置金村)

海人娘子玉求むらし沖つ波畏き海に舟出せり見ゆ

(6・一〇〇三、鞆井大成)

潮満たばいかにせむとか海神の神が手渡る海人娘子ども

(7・一一二六)

もっと端的に、「海人」を労働ばかりしていて、そのほかのことを考える余裕のない存在として描いている歌もある。

志賀の海女は藻刈り塩焼き暇なみ櫛笥の小櫛取りも見なく
(3・二七八、石川少郎)

志賀の浦に漁りする海人家人の待ち恋ふらむに明かし釣る魚
(15・三二六三、遺新羅使人)

以上のように『萬葉集』にうたわれる「海人」は、集団で忙しく立ち働く存在という印象が濃い。ところが、旅行く宮廷人士からは、「海人」の女性は魅力的に見えたりしい。

娘子らが 麻笥に垂れたる 続麻なす 長門の浦に 朝な
ぎに 満ち来る潮の 夕なぎに 寄せ来る波の その潮の
いやますますに その波の いやしくしくに 我妹子に
恋ひつつ来れば 阿胡の海の 荒磯の上に 浜菜摘む
海人娘子らが うながせる 領衚も照るがに 手に巻ける
玉もゆららに 白袴の 袖振る見えつ 相思ふらしも
(13・三三四三)

右の歌の「海人娘子」は、旅人の目にとまった女性である。この歌の結句「相思ふらしも」については、「海人娘子」が作者に好意を持つていることを示すと受け取る見方もあるが(井上通泰氏『萬葉集新考』など)、『日本古典文学大系 萬葉集』、窪田空穂氏『萬葉集評釈』および土屋文明氏『萬葉集私注』は「海人娘子」に相思う男がいて、その男に向かって袖を振っていると見ている。一方、『日本古典集成 萬葉集』は「表面の相手は海人娘子であるが、背後に家の妻を意識している」と述べ、伊藤博氏『萬葉集釈注』がこれに等しい。

この歌の後半部は、「我妹子に恋ひつつ来れば」を受けて望郷の念を抱きつつ目にした旅先の景の叙述で占められている。したがって、「海人娘子」を通して家郷の「我妹子」を意識しているのを見る『日本古典集成 萬葉集』などの説によるのが穏

やかであろう。付言すれば、この袖を振る「海人娘子」には作者の幻想という要素もあるのではないだろうか。

我が妻はいたく恋ひらし飲む水に影さへ見えてよに忘れず
(20・四三二二、若倭部身麻呂〈遠江国防人〉)

右は、遠く離れている妻の姿が水に映って幻のように見えることをうたっている例である。三三四三の歌の「袖振る見えつ」も、海人娘子が誰かに向かつて手を振る姿を通して家郷の妻が自分に手を振っている様子を幻想しているのであろう。この「海人娘子」が「領巾」「玉」を身につけているようにうたわれているのも、旅人の側の幻想であることを示すひとつの証拠といえる。つまり、この場合の「海人娘子」は、四三三二の防人歌における「飲む水」と同様な役割を果たしているのである。

右は、家で待つ妻との関連から「海人娘子」への関心が見られた例であるが、一方で、「海人娘子」に対しての求愛をうたうこともある。

難波潟潮干に出でて玉藻刈る海人娘子ども汝が名告らさね
(9・一七二六、丹比真人)

ここにうたわれる求愛は軽い性質のもので、この歌の「海人娘子ども」は実際に浜辺にいる「海人」の女性ではなく、宴席の遊行女婦を「海人娘子ども」に見立てて呼びかけたものであろう。

う(武田祐吉氏『増訂萬葉集全註釈』、佐佐木信綱氏『評釈萬葉集』など)。これに対する答への歌には、

あさりする人を見ませ草枕旅行く人に我が名は告らじ
(9・一七二七)

とあり、「あなたのおっしやるとおり、私のことは浜辺で藻を摘む者とも見てください。旅行く人に名前は打ち明けないでおきましょう」と拒絶する。このやり取りの中での「海人娘子ども」は仮想のものと思われるが、だからこそ、「海人娘子」に対して都人が抱いている印象が強く現れた例ということもできるだろう。

「海人」が「恋」と関わってうたわれる場合は相聞の歌に多い。ただし、その場合、多くは歌い手の恋の思いを際立たせるための題材として用いられている。たとえば、次の例では恋の苦しみを味わうよりはいつそ「海人」になりたいとうたわれている。

なかなか君に恋ひずは比良の浦の海人ならましを玉藻刈りつつ
(11・二七四三)

なかなか君に恋ひずは繩の浦の海人ならましを玉藻刈る刈る
(11・同或本歌)

後れ居て恋ひつつあらずは田子の浦の海人ならましを玉藻刈る刈る
(12・三三〇五)

右の三首は、次のような類想の歌とともに、通常ならば忌避し

たいはずのこの方が恋に苦しむよりもまだましだとうたうことで恋の苦しみの深さを訴える歌である。

かくばかり恋ひつつあらずは高山の岩根しまきて死なまし
ものを
(2・八六、磐姫)

かくばかり恋ひつつあらずは石木にもならましものを物思
はずして
(4・七二、大伴家持)

磐姫皇后の作に、いつそ死んだほうがましだとうたわれるのは、死によって恋の苦しみから逃れられると考えたからである。「恋ひつつ」ある今と引き比べて持ち出されるのは、単に辛いことであるだけでは不十分で、辛くても「恋ひ」の思いから逃れることができる事態でなければならぬ。右三首がいつそ「海人」になりたいとうたうのは、死ぬことや石木になることと同じく、「恋」の苦しみから逃れるためである。したがって、「海人ならましを」という表現は、恋に苦しんでなどいないで、いつそ恋の思いなどは縁のない「海人」にでもなつてしまつたほうがましだという表現として捉えるべきであろう。ここでも「玉藻刈りつつ」「玉藻刈る刈る」とうたわれ、労働する「海人」という印象がつよいことが知られる。「海人」の労働は厳しく辛いものであろうが、それでも今の恋の苦しみよりはましだ、と恋情の深さを訴えているわけである。

「海人」と「恋」とは逆説的に関連づけられることが多い。たとえば、「海人」は恋を忘れる「恋忘れ貝」を持つていとされる。

海人娘子あませとめ潜き探るといふ忘れ貝あまよにも忘れじ妹が姿は

(12・三〇八四)

右は、忘れ貝というものが世の中にはあるが、この私は忘れな
いと誓っている歌である。ここでは、忘れ貝を一般的には効果
があるものとして捉えているが、『萬葉集』の「恋忘れ貝」は効
き目がなかつたとうたわれることが多い。歌では恋の思いの深
さを強調するための道具として用いられているからである。

手に取るがからに忘ると海人の言ひし恋忘れ貝言ことにしあり
けり
(7・一一九七)

歌い手の目には、労働に明け暮れる「海人」は「恋忘れ貝」の
効き目が「手に取るがからに」現れるように映っていたのであ
らう。その「海人」の言葉に従つて「恋忘れ貝」を拾つてみた
が、自分には効き目がなかつたという歌である。

この他、「海人」の塩焼きを恋心を引き起こす序として用い
た歌も多い。

…網の浦の 海人娘子あませとめらが 焼く塩の 思ひぞ焼くる 我
が下心

志賀の海人の煙焼き立て焼く塩の辛からき恋をも我れはするかも
(11・二七四二)

「海人」の塩焼きは、大和を遠く離れての旅を強く実感させる風景であったが、右の例に見えるように、塩焼きと「恋」とは「焼く」という語で繋がっているだけで、「海人」そのものの恋がうたわれているわけではない。

以上のような「海人」の様相をまとめると、「海人」はにぎやかに労働にいそしんでいる存在という印象が強い。歌の中に表現された「海人」の女性は、その姿を見る旅人には家の妻を連想させ、恋情を刺激するものではあるが、「海人娘子」を含む「海人」全体がどのような存在として捉えられていたかといえば、恋の苦しみなどは無縁な存在であるかのように受け止められていたといえよう。

これは、「海人」が「都人」と対等の存在として描かれているということではない。たしかに「海人」は低く見られていたであろう。だからこそ、景色の一部のようにたわれもする。だが、都人が「海人」を見る時には、身分の違いという要素よりも、「海人」の生活に対する関心の方が主となっていることが指摘できる。

三、「旅行く我れを」

人麻呂歌における「海人とか見らむ旅行く我れを」は、旅人である自分が「海人」でもあるかのように見られることを不本意に思っている表現であることは確かである。ただ、それが不本意なのは、「海人」が卑賤であることが直接の原因ではなく、「海人」が旅先の土地で日常生活を営んでいる存

在であることが原因なのではないだろうか。「海人」ととつての海辺は労働にいそしむ日常生活圏であるのに対し、「我れ」ととつての海辺は旅先の非日常の場である。

労働する「海人」の生活は危険を伴う辛いものであったであろう。だが、どれほど苦しかろうと「海人」は自らの家郷に暮らしている。一方、旅人は家を離れ、家を恋しがりつつ孤独に耐えなければならぬ。旅人の視点からすると、家に暮らしている「海人」よりも旅人である「我れ」の方が厳しい状況にある。これまでに見えてきた「海人」をうたう歌において、「海人」が恋の思いとは無縁の存在のようにうたわれているのは、「海人」が事実として恋心と無縁であったためではあるまい。「海人」がうたわれる場合には、その歌い手は都から訪れた人であることが一般である。その歌い手が家や妻に対する恋の思いにとらわれた旅人であったことが原因で、忙しく働いている「海人」が対照的に何の憂いもない存在であるかのように捉えられるという結果を生んだのであろう。

旅に行く者の目からすると「海人」たちは円満に暮らしているように見える。それに対して自分は、寂しくつらい旅にある。ところが、家の妻を希求する心情は、外見に表れるものではない。自らを含む海辺の景色を他者が見れば自分も「海人」も区別なく見えるのかもしれないという気付きが「旅行く我れを」という自己主張を生んだのではないか。

すなわち、人麻呂歌の「海人とか見らむ旅行く我れを」は、家で待つ妻への恋情に苦しむ自分であるのに、無心に働いている現地「海人」だと人は見るのではないかという不満をうった

えた表現と思われる。

この「海人とか見らむ」という表現には、次のような類例が存在する（今問題としている人麻呂歌を①として、あわせて掲出する）。

①荒栲の藤江の浦に鱸釣る海人とか見らむ旅行く我れを
一本には「白栲の藤江の浦に漁する」といふ。

(3・三五、柿本人麻呂)

②網引する海人とか見らむ飽の浦の清き荒磯を見に來し我れを
(7・二一八七、人麻呂歌集)

③浜清み磯に我が居れば見む人は海人とか見らむ釣りもせなくに
(7・二二〇四)

④藤波を仮廬に作り浦廻する人とは知らに海人とか見らむ
(19・四二〇二、久米朝臣継麻呂)

以上の四首に加えて「海人とか見らむ」という例が二例見える。

⑤潮早み磯廻に居れば潜きする海人とか見らむ旅行く我れを
(7・一三三四)

⑥白栲の藤江の浦に漁りする海人とか見らむ旅行く我れを
柿本朝臣人麻呂が歌には「荒栲の」といふ。また「鱸釣る海人とか見らむ」といふ。

(15・三六〇七、遣新羅使人誦詠古歌)

右の二例も、自分のことを「海人」と人が見るのではないかと述べる点は同じである。

右に掲げた類例は、いずれも人麻呂の歌(①)の影響下にあるものと思われ、内容的には極めて類似している。特に、「旅行く我れを」(①⑤⑥)「見に來し我れを」(②)のように、「我れ」が意識的にうたわれることが多い。③も「浜清み磯に我が居れば」と、海辺にいる自分を取り立てている。この「旅行く我れ」という表現は、他に二例見える。

家人は婦り早來と伊波比島齋ひ待つらむ旅行く我れを

(15・三三三六、遣新羅使人)

我が妻も絵に描き取らむ暇もが旅行く我れは見つつ偲はむ
(20・四三二七、物部古麻呂(遠江国防人))

ともに、「家人」「我が妻」と対になる存在として「旅行く我れ」を規定していることが明白である。②③⑥の歌もまた、「海人」たちのにぎやかな集団とは対極にある「我れ」の孤独をうたうものであつて、旅に疲れた自らがまるでまずしい「海人」のようだと自嘲しているのはあるまい。

ただし、類例中で時代的にもっとも新しい作である④は、他とはやや性格を異にする。これは越中国の官人たちが布勢水海を遊覧した際の作である。越中国府から程近い布勢水海への遊覧であるから、羈旅における詠として捉えるべきではあるまい。「藤波を仮廬に作り浦廻する」のは旅先の辛い宿りではなく、官人たちの風流の営みと考えられる。水辺に「仮廬」を作

るのは「海人」にも見られる営みであろうが、「藤波」を「仮庵」とするのは風流を解する者の業である。ところが、自分たちの風流な営みが、このあたりで普通に見られるありきたりな光景と見られるかもしれない。そのことに對する不満をうたい、自分たちの風流を誇ったのがこの一首であろう。この風流を解するのは我らだけであるという自負がここにはある。

人麻呂の歌においては、旅にあるということ強く意識している「我れ」こそが眼目である。何の憂いもなく鱸を釣る「海人」と見られてしまうかもしれないことは「旅行く我れ」にとつてはあまりにも無念なことである。自分は辛く寂しい旅人なのであるとうたうことで、旅の愁いを表現したのがこの第四首であろう。

人麻呂の「羈旅の歌八首」には、他にも旅を行く者の家郷へと向かう心情を表現した歌が多い。たとえば、第三首は、

淡路の野島の崎の浜風に妹が結びし紐吹き返す

(3・二五)

と、家で待つ「妹」が結んだ「紐」をうたっている。第五首は、

稲日野も行き過ぎかてに思へれば心恋しき加古の島見ゆ

一には「水門見ゆ」といふ (3・二五三)

という歌であるが、井出至氏「柿本人麻呂の羈旅歌八首」(『遊文録 萬葉篇一』一九九三年。初出は『萬葉集研究』第一集、

一九七二年)は、この「敏馬」に「見ぬ女」を感じ取っていた可能性を指摘している。とすれば、この歌にも家郷の妻への意識を見ることが可能になる(伊藤博氏『萬葉集積注』)。また、第六首と第七首は、

燈火の明石大門に入らむ日や漕ぎ別れなむ家のあたり見す

(3・二五四)

天離る鄙の長道ゆ恋ひ来れば明石の門より大和島見ゆ

(3・二五五)

という歌で、「家のあたり見す」(二五四)「大和島見ゆ」(二五五)という表現に家郷大和への執着が顕著に見える。

以上考察の対象としてきた第四首も、これらの歌とともに「旅行く我れ」の孤独をうたうことで家の妻へと向かう心情を内包した作品であったということが出来るだろう。

四、「羈旅の歌八首」の位置づけ

『萬葉集』の羈旅の歌全般を見渡すと、しばしば「家」へ向かう心情がうたわれる。「旅」が「家」を離れることであることからすれば、その「家」に帰着することを願う心情は自然である。が、萬葉歌において、家郷を偲ぶ歌は、実はそれほど古くから存在したものではないことが指摘されている。阿蘇瑞枝氏「万葉集羈旅歌の世界」(『万葉和歌史論考』一九九二年。初出は『論集上代文学』第一〇冊、一九八〇年)は、羈旅の歌

を内容において分類し、家郷を偲ぶ歌の発生は萬葉集のいわゆる第二期以降であるとす。阿蘇論において、人麻呂作以外で「家郷を偲ぶ歌」として掲出された作は次の通り。

- 1・63 (山上憶良) / 1・64 (志貴皇子 慶雲三年) /
1・66 (置始東人) / 1・67 (高安大島) / 1・68 (身
人部王) / 1・71 (忍坂部乙麻呂) / 1・72 (藤原宇合)
/ 1・73 (長皇子) / 3・280 (高市黒人) / 3・287
(石上卿) / 9・2676 (大宝元年紀伊行幸從駕者) /
9・2677 (大宝元年紀伊行幸從駕者)

歌の内容を分類する場合、ある程度の誤差は生じるであろうから、右の歌以外にも家郷を偲ぶ歌に入れるべき例があるかもしれない。だが、阿蘇論の整理は全体の傾向としては十分に同意できる。右のうち巻一の例はすべて年次順に配列された巻の後半部分に集中しており、いずれも慶雲から和銅年間の作と思われる。巻三の二例はともに正確な作歌年次を知りたいが、人麻呂よりも先行することは考えにくい。おおよそ大宝元年紀伊行幸当時の作がもつとも早く、慶雲三年の難波行幸以降が主であると把握できる。一方、柿本人麻呂の作歌のうち、その作歌の時期を知りうる歌は、持統三年に亡くなった日並皇子への挽歌がもつとも古く、文武四年に亡くなった明日香皇女への挽歌がもつとも新しい。人麻呂歌集には、大宝元年の紀伊行幸時に結び松を見る歌(2・146)がある。この他、作歌年次の知られない歌には、大宝年間以降の作もあることと想像され

るが、人麻呂の主たる作歌時期が、大宝元年以前にあることは認められるであろう。すなわち、家郷を偲ぶ歌は、人麻呂以降に増加したということになる。

人麻呂の「羈旅の歌八首」は羈旅の歌の中で家・妻を偲ぶ歌としてはかなり早い時期の作と言える。ただし、人麻呂以前にも、軍王の作(1・5、6)には家の「妹」を偲ぶという要素が認められるので、旅にあつて家を思い、妻を思うとうたうことが人麻呂に始まるとまでは断言できない。けれども、家・妻への視線が人麻呂の「羈旅の歌八首」の一つの大きな特徴をなしていることは確かである。

注

(1) 吉永論に先行して、鴻巣盛広氏『萬葉集全釈』に「旅人のみすぼらしい姿が、漁夫に見違へられさうなのである」という指摘がある。

(2) 平館英子氏「萬葉歌の意匠」(『萬葉歌の主題と意匠』一九九八年、初出は『日本古典文学の諸相』一九九七年)は、

「荒袴の藤江の浦」が喚起する「荒袴の藤衣」は漁師の日常着であり、「鱧釣る海人」には豊かな獲物を捕るその土地の優れた漁師としての生活の営みがある。しかし、「我れ」にはそれはない。「我れ」にとつてその海人と一致するのは外見のみであり、そうした豊かな獲物を喜ぶ共同体の生活を共有できずにあることへの気付きが本文歌における「旅行く我れ」という把握であろう。と述べ、官人としての自負と自嘲に加えて、現地の共同体の外にある自己への気づきが一首の背景として認められるとしている点が注目される。

(3) 助詞「か」と「や」の違いについては、「か」は疑問、「や」は問いかけと把握する大野晋氏「係り結びの研究」の論による。また、『萬

葉集』の前期の歌で「か」が用いられていたような文脈でも、後期の歌になると「や」が用いられるようになることが、沢瀉久孝氏「か」より「や」への推移（『萬葉集の作品と時代』）に指摘されている。

（みた せいじ 駒沢女子大学人文学部）